

特集 薬局経営

個人在宅、比率7～8割目指し業容拡大

エスファーマシー、「在宅支援薬局」の移転・拡張も検討

2023/12/25 04:50



エスファーマシーは「乙訓調剤薬局」などの名称で展開している

「乙訓調剤薬局」などを展開するエスファーマシー（京都府長岡京市）は個人在宅の業容を一段と拡大する。来年1月に新設する薬局で多くの個人在宅を見込むほか、在宅に特化した「在宅支援薬局」の受け入れが許容限度に達していることから、広い場所への移転を検討している。薬剤師で代表取締役の石川達也氏は「個人宅の在宅が真の在宅」と位置付けており、今後、個人宅の比

率をさらに引き上げていく方針。在宅の実績に占める個人宅の比率は現在約5割だが、将来は7～8割に持っていきたい考えだ。

同社は2003年の設立当初から在宅に注力してきた。今では9店舗全店で在宅を行い、ドミナント展開している乙訓地域で大きな実績を持つ。病院の地域連携室と直接やり取りしてコンスタントに個人宅のオファーを得ている一方、介護関連施設の営業

活動は基本的に行っていない。

石川氏は在宅に関して「施設を1棟抱えて回した方が収益は高いと思うが、われわれの認識としてはそれはもはや在宅ではないと思っている」と述べた上で、同社が目指しているのは個人宅の在宅であることを強調する。

●在宅のオファー受け、長岡京市に1月開局

来年1月上旬には長岡京市に「乙訓調剤薬局滝ノ町店」を新設する。在宅も行っている医師から声をかけられ、同医師のクリニックが移転するのに合わせて開局する。石川氏は同医師に関して「150～200人の在宅患者を持っている。（地元では在宅を行う医師の中で）トップスリーに入ると思う」と話す。



代表取締役の石川達也氏

同店の面積は25坪ほど。店内にはクリーンベンチも設置する。スタッフは社内の異動で、薬剤師3人・医療事務職2人を配置する。同社では薬剤師も事務職も、年収を他社の約1.2～1.3倍と優遇しているため、人が集まりやすいという。

同店は開局後、順調に推移すれば、既存店の「在宅支援薬局おとくに」（京都府向日市）に次ぐ在宅実績になるとみている。同社が在宅のオファーを受けて、新店舗を出店するのは今回が初めて。オープンすると、乙訓地域で在宅に積極的な開業医をほぼ全員抑えることになる。

同社では近年、乙訓地域以外の医師などから「在宅をやってくれる薬局を作ってほしい」「個人宅を受けてもらえないか」など、開局を望む声が増えてきたという。石川氏は「今後広げるのであれば、乙訓地域から少し外れた開業医の要望に応えられるよう、薬局を乙訓エリアの際（きわ）のところに作って対応する」との方向性を示す。

●在宅支援薬局、移転で受け入れ人数増加へ

同社は07年、在宅に特化した薬局として「在宅支援薬局おとくに」を開局した。同社で「在宅支援薬局」の名称を冠した唯一の店舗に当たる。クリーンベンチを設置しており、今年4月には日本緩和医療薬学会の在宅緩和ケア対応薬局の認定を、9月には地域連携薬局の認定を、それぞれ取得した。同店の在宅は約7割が個人宅。患者数は約230人、月間の在宅算定件数は500回前後に上るという。

同店は同社の在宅売上高の約半分を占めている。薬剤師5人・医療事務職2人で運営しているが、増加するオファーに許容量が追い付かず、今後の移転を検討。移転先は乙訓地域を念頭に置いており、候補地も複数出てきている。

石川氏は現在約20坪という同店の店舗面積を移転によって広くし、「受け入れ人数を増やしていきたい」考え。「在宅支援センターという大きな施設を造って、在宅の旗艦薬局として展開していきたい。クリーンルームを設置して、他社が見学に来るような店舗にしたい」と構想を明かす。将来は在宅支援薬局2号店の開設もあり得るとしている。（星 光洋）

All documents,images and photographs contained in this site belong to JIHO,Inc.
Use of these documents, images and photographs is strictly prohibited.
Copyright (C) JIHO,Inc.

株式会社じほう